

「海をきれいに、安全に、秩序正しく」

海上保安友の会札幌支部



# 会 報 (第 3 6 号)

令和2年3月25日発行



表紙写真 (小樽雪あかりの路22・小樽運河会場)

海上保安友の会札幌支部事務局  
〒047-0007  
小樽市港町5番2号 小樽地方合同庁舎  
小樽海上保安部 管理課 内  
電話 0134-27-6118 FAX0134-23-9700

会員数 161名 (正会員 82名、家族会員 79名) (H31.3現在)

## レールカーニバル in おたるのトロッコ体験乗車にうみまる初登場 ～小樽海保が鉄道とコラボで海難防止活動～

11月2日旧国鉄手宮線でトロッコ（ペダルをこいで軌道を走る自転車）乗車体験のできる「レールカーニバル in おたる」が開催されました。トロッコに乗ろうと集まった多くの観光客や市民でにぎわう停車場にうみまるが登場。乗車の順番を待つ間にうみまると並んで子供たちが記念撮影、トロッコに乗った親子が発車を見送るうみまるに笑顔で手を振っていました。

このレールカーニバルは北海道鉄道文化保存会が主催して行われており、このイベントを手伝う海上保安友の会札幌支部会員が「小樽は鉄道と港の町、鉄道企画に港代表として海保キャラクターを登場させたい。来場した子供たちも喜ぶ。海保PRにもなる。」と発案されコラボが決定しました。小樽海上保安部も「市民に港や海のことへ関心を寄せてもらえれば海難防止にもつながる。」とうみまるも出勤？させイベント活動しました。

旧国鉄手宮線の軌道に観光トロッコを走らせるこのイベントは平成23年に始まり、以降春夏秋冬の毎年3回開催されているもので、うみまるも大人気、当庁アピールはうまく実施できた企画となりました。



## 友の会会員による巡視船そらち見学会 ～紋別保安部、巡視船そらちの協力を経て～

令和2年2月15日、巡視船そらちの協力を経て友の会札幌支部の希望者を招き、巡視船の一般公開を行いました。公開に当たってはそらち船長の挨拶から始まり、船長自ら船の説明も実施してくださり、普段見ることのない巡視船（PM型で就役したばかりの最新鋭の巡視船）を見学できた会員の方は大変満足されていました。

これらの見学会は、船の運用計画によって直前まで実施の可否が決定できないところですが、小樽保安部としては友の会会員の方に満足していただけるよう小樽港に入港する巡視船がありましたら計画していこうと画策しているところです。皆様へのお知らせはホームページとなりますので定期的にチェックしていただければ幸いです。



## 小樽雪あかりの路イベントへ友の会会員と保安部が共同参加 ～友の会会員とともに雪像出展、巡視船えさんの船体イルミネーション～

2月8日夕刻からの小樽市恒例の雪あかりの路のイベントに小樽海上保安部は海上保安友の会メンバーと共同で雪像を制作出展し「未来に残そう青い海」をPRしました。

小樽雪あかりの路は、キャンドルの明かりで照らす雪や氷でできた灯籠やオブジェを市民らが制作し街中に設置するイベントで、雪の町小樽をPRし盛り上げるため毎年2月に1週間開催されています。

保安部は、灯台と船を模した雪像を出展し雪像は約50本のキャンドルで照らされ、雪像の前には多くの観光客や市民が立ち止まってカメラのシャッターをきっていました。ひときわ明るく「映えた」事でしょう。今年も港に着岸している巡視船えさんを船体イルミネーションで飾りつけイベントを盛り上げました。このイベントへの小樽海上保安部の参加は初めてでありましたが、友の会会員で雪像づくりの経験者から指導助言を受け、手伝ってもらいながら保安部各課の職員は氷点下の気温の中交代で作業にあたり雪像を完成させました。

初日17時の雪像の点灯には小樽雪あかりの路実行委員をつとめる海上保安友の会札幌支部の北村猪之助顧問が立会われ、顧問から雪像制作にあたった保安部職員、友の会メンバーへのねぎらいの言葉がありました。

※ 画像に関しては、投稿のところで紹介します。

## 【投稿記事】

# ～海氷情報センター開設50年記念講演・ パネル展示によせて～

海上保安友の会札幌支部  
会長 徳梅 真

札幌支部の皆様におかれましては、いかがお過ごしのことでしょうか。  
会長の徳梅です。

さる令和元年12月11日（水）に札幌の北海道大学学術交流会館において開催されました講演を拝聴致しました際のことを、私の「流氷」についての思い出ということで、報告させていただきます。

第一管区海上保安本部海洋情報部長の小西直樹様の講話をお聞きしている中で、私と流氷との出会いは古い話で恐縮ですが、昭和38・39年の根室です。当時、父親が根室海保に勤務をしていた関係で、流氷をはじめて見ました。港内は流氷で結氷し弁天島との間が完全に繋がってしまい、人と車が行き来している情景を見た時の様子も講話をお聞きしている間に、大変懐かしく回想しておりました。また、実際に私も流氷の上に乗って、氷の厚さも直に見たことや流氷がこすれ合う時に発生する「鳴き声」も港からかなり離れたところまで聞こえてくるという状況もすごいなと感動したものです。また、その2年間の間に根室に初代巡視船宗谷（南極観測支援や灯台補給船としても活躍した船）が寄港し乗船させていただく機会があり、そのことも非常に感動をしたのを「きのうきょう」のように懐かしく思い出されました。

毎年のように遠く離れたロシアのアムール川からオホーツク海を南下してくる「この使者（流氷）」を調査・研究されている北大の研究者の方々、またそれを支援されている「そうや」乗組員の皆様には大変なご苦労があるかと思えます。地球温暖化により、流氷の状態は年々変化しているものの、今後も北海道沿岸に流れ着く「氷の使者」とは向かい合って共存していくことでしょう。



## 【投稿記事】

# ～日ロ合同訓練から帰港した巡視船つがる お出迎え、船内見学～

海上保安友の会札幌支部  
理事 岩井 容子

9月7日、巡視船つがる（PL02 3652 t 函館母港）が日露合同訓練を終えてサハリンより母港へ戻る途中、小樽に寄港しましたので友の会メンバーで出迎えに行きました。

今回の訓練は、サハリン州国境警備局との密輸密航補促訓練、海中転落者の吊り上げ訓練のほか、サハリン市民へ巡視船つがるの一般公開を行い、日ロの友好関係の向上に寄与したものです。

小樽港第2ふ頭10番岸壁に接岸し、巡視船つがる入港式の後、鈴木浩久船長のご好意で、つがるの船内を見学させていただきました。

船内、船橋見学の後、後部飛行甲板に駐機している、シコルスキー型ヘリコプター「はいたか」の見学もさせていただきました。機体に乗っても良い、なおかつヘルメットをかぶっても良いとのご好意で、テンションMAXで、写真撮影をしました。

見学を終えて一旦下船した後、午後函館へ向けての出港を見送ろうと、再度10番岸へ戻ったところ、ヘリコプターを洗って乾燥するため、ローター（羽）を回すところに遭遇。10分ほどの試運転後、格納庫に格納するところまで、見ることができました。

突然ですが、私は巡視船が大好きです。

新造船の眩しいほど白いピカピカの船もちろんですが、年季の入ったベテラン船も好きです。

つがるも1979年就役で、十分ベテランの船ですから、傷、汚れ、サビもかなり見られます。私にはそれらが、今まで懸命に働いたことを無言で物語っていて、自信と誇りと貫禄に満ちているように見え、「ご苦労さまです」と頭が下がります。

ピカピカの新しい船には、「これから大変だけど、頑張れ!」とエールを送りたくくなります。

ロシアから帰港後のお忙しい中、見学の時間を取っていただいた鈴木船長はじめ、つがるの乗組員の皆さん、ありがとうございました。これからも微力ですが、海上保安庁を応援して行きたいと思えます。



## 【投稿記事】

# ～「光波万里」灯光に願いをこめて～

海上保安友の会札幌支部  
顧問 北村 猪之助

令和2年2月15日巡視船「そらち」の見学会に参加させていただきました。本船は就役2年目の新鋭船で森本船長さん自らのご説明で高速船としての特徴やブリッジでの説明等分かりやすく大変勉強になりました。

帰りにブリッジより沖を見ますと防波堤と赤灯台が見えます。

小樽防波堤は、広井勇博士とその愛弟子である伊藤長右衛門技師が心血を注いで工事に当たった事はよく知られています。

当時の人々にとってこの防波堤と灯台はいかなる願いがこめられたものだったのでしょうか。それを端的に表す言葉が赤灯台の基部に埋められている事は意外と知られていません。その言葉は「光波万里」の四文字です。

レーダーのない昔、灯台の光は沖に行く船にとっていかにも頼りになった事でしょう。また船を待つ人々にとっても沖行く船をこの灯火が無事に招いてくれる事を心から願った事でしょう。

「光波万里」とは

灯台の光が万里に届き船を無事に導いて欲しいという人々の心の願いであったのです。光波万里の願いは海上保安庁に受け継がれていると思います。海上保安庁はご苦勞の多い仕事ですが、「光波万里」に託された思いを忘れず海上の安全の確保に頑張ってください。



## 【投稿記事】

# ～潮ねりこみ、小樽雪あかり、巡視船そらち見学～

海上保安友の会札幌支部  
理事 木又 孝

数ある参加行事の中から小樽潮まつり潮ねりこみ参加と小樽雪あかりの路雪像展示及び巡視船そらち特別公開見学会について感想を述べさせていただきます。

### ・小樽潮まつり潮ねりこみ

小樽市最大の夏のイベントに海保うしお会の皆様と共に潮まつりに参加させていただきました。その中でもメインイベント「潮ねりこみ」は88梯団約6800人が市街地の1.8キロを練り歩くもので、一管本部、小樽保安部の方々と一体になりながら踊り楽しい一時を過ごさせていただきました。また我々踊り手だけでなく日射病予防の為に飲み物を用意していただいたり、旗を振って音頭を取っていただいたり、その他色々な準備をしていただいた方々の苦労は大変なものだったと思うと同時に感謝に耐えません。どうもありがとう御座いました。

### ・小樽雪あかりの路雪像展示

次に小樽雪あかりの路雪像展示についてですが2月9日から2月16日の8日間開催されました。来場者数が前年比3割減の31万5200人で第22回の中で過去3番目に少なく、新型コロナウイルスによる影響で大幅減になりました。その中で小樽海上保安部が主体となり友の会も御手伝いさせていただき雪像を製作し満足の行く出来ばえになったと思います。途中暖冬の影響もあり雪像の補修等で苦労された方々に尊敬の念と感謝を送りたいと思います。おかげ様で無事に8日間の日程を終える事が出来ました。

### ・巡視船そらち特別公開見学会

最後は巡視船そらち特別公開見学会に参加させていただきました。そらちは、オホーツク海沿岸及び沖合いの治安維持及び海難救助をはじめ海洋権益の確保並びに領海警備等の保安業務を実施しています。平成30年9月に竣工された新造船で居住区が大変きれいなのが印象的でした。また森本船長の案内で船内見学をさせていただきました。その中で滑走型なので高速化が図られ方向性も優れているとの説明を受けました。しかしながら少ない予算と人員で日本の領海を守っていただいている姿勢には大変頭が下がる思いです。



## 【投稿記事】

# ～小樽雪あかりの路22オブジェづくり参加～

海上保安友の会札幌支部  
理事 高橋 司

「夕暮れ時から明りが灯され始め、ロウソクの明りで埋め尽くされる小樽」

今やすっかり小樽の冬の風物詩となった小樽雪あかりの路が、今年も2月9日から16日の8日間、開催されました。今年22回目を迎え、毎年40万人前後の来場者があるこのイベントも、今年もCOVID19等の影響で中国人をはじめとする観光客の減少で期間中の来場者は31万人と例年より下回ってしまいました。

今年このイベントを盛り上げる為に旧手宮線会場にて、小樽海保が参加を決定し、海保職員、在樽友の会有志で立派なオブジェを製作し、このイベントに明りを灯しました。

事の発端は、自分が昨年春、藤本小樽海保部長就任後の談話中に合同庁舎前の雪あかり会場が年を追う毎に寂しくなっているの、今年海保でも友の会も含めてパワーアップして作りませんか？という一言から、年明け藤本部長から、「手宮線にオブジェを作る事に決まりました」と聞いてびっくりしました。

オブジェ製作作業は、2月3日から管理課長以下数名で氷点下の中、毎日午後から夕方まで製作に取り掛かり、在樽友の会有志が6、7日に加勢し「あれもつけよう、これもいいかも」と試行錯誤を楽しみながら、見事立派な巡視船と灯台の雪あかりオブジェを完成させました。期間中、夕暮れから大勢の見物客が訪れ、旧手宮線会場内で一際光り輝く小樽海保のオブジェを見て「綺麗だねえ」と言っていたり、記念写真の撮影、オブジェの巡視船の船側に書かれた「JCG」の文字を声に出してくれるなど、みんなで頑張って作って良かったと思える一コマも沢山ありました。私もこのイベントで海保の啓発活動に少しは貢献できたのではと信じています。

今回は開幕初日に寒波が訪れ、その後は季節外れの暖気となり、オブジェが溶けてしまうハプニングに見舞われましたが、小樽海保職員の皆様、友の会有志の皆様による毎日午後からの修復作業のおかげで、ロウソクの灯りを最終日まで絶やさずに、イベントを終了できました。製作、会期中の保守に携わった海保職員様、友の会有志の皆様、寒い中大変お疲れ様でした。また来年も参加したいですね(笑)



## 【投稿記事】

# ～小樽の海を見守る「日和山灯台特別公開」～

海上保安友の会札幌支部  
理事 澤田 奈緒美

小樽行きの列車に乗ると、銭函から小樽築港までの区間は海岸線のすぐそばを走ります。夕暮れ時には、祝津の高島岬にほのかな灯りが見え、「ああ、小樽に帰ってきた。」とホッとした気持ちになります。その灯りは、我が街小樽が誇るものの一つ、日和山灯台です。

1883年、白色の木造六角形の灯台として建設された日和山灯台は、昭和に入ってからコンクリート造りに改築、赤白の横帯線が塗られて現在の姿になったそうです。映画「喜びも悲しみも幾年月」のラストシーンに登場したことで有名です。昨年、33年ぶりに大規模な改修工事が行われ、12月14日に特別公開があったので、さっそく見学をさせていただきました。

改修工事を終えた日和山灯台は、遠くから見ても赤と白のラインが鮮やかで、その姿はとても凛々しく感じられました。中へ入ると、どこを見てもピカピカです。室内には、日本各地の灯台の写真や、灯台用電球などが展示されていました。海上保安官の方が、日和山灯台はセンサーによって自動で点灯・消灯すること、8秒ごとに1回閃光すること、その光は約35km先まで届くことなど丁寧に説明をしてくださり、灯器についてより詳しく知ることができました。灯台の2階部分には見晴らし台が設けられていて、そこから日本海を一望することができ、トド岩で寝転ぶトドまで見られて驚きました。灯台の周囲に設置されたインターロッキングには、ブロックで「海の『もしも』は118番」と書かれており、見学に訪れた方々への118番周知もできるようになっています。30分ほど灯台の中と外を見て回りましたが、訪れた方々のための工夫がたくさんあり、見応えがあって楽しめました。

リニューアルをして、ますます存在感の増した日和山灯台。これからもずっと、小樽の海を見守ってくれることでしょう。小樽海保の皆さん、お忙しい中での特別公開、本当にありがとうございました。



【写真投稿】



♪♪原稿・写真募集中♪♪

会員皆様の投稿記事又は写真などをお待ちしています。  
次の送り先に郵送又はFAXにて送付してください。

送り先：海上保安友の会札幌支部事務局  
〒047-0007 小樽市港町 5-2 小樽海上保安部内  
TEL0134-27-6118 FAX0134-23-9700